

法人会情報通信

No.79

はっらつタイム

歴史にみる病と健康

平清盛とマラリア

[表紙写真]箱根寄木細工(神奈川県)

医学ジャーナリスト・医学博士

愛知医科大学客員教授・東京通信大学准教授

専門は公衆衛生学・医療安全・心理学・医療制度など幅広い。各大学で教壇に立つほか、医学番組の監修、テレビコメンテーター、講演活動をこなす。医学博士(愛知医大)、社会科学修士(東洋英和女学院大学大学院)。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事、厚生労働省研究班委員、経済産業省委員会座長など。

「いつか来るはじめての死～今をより良く生きるために～」(単著)、「戦国武将の健康術」(単著)、「忍者ダイエット」(単著)。「わたしのカラダを医学して!」(萌系医学解説本・監修)など著書多数。



植田美津恵

平清盛とマラリア

世の中が現代のような長寿社会になる前は、歴史に名を遺す有名人でさえも病にかかって命を落とすことが少なくありませんでした。新シリーズ「歴史にみる病と健康」では、歴史上の有名人がかかった病気を現代社会と照らし合わせて振り返ります。



政治・経済に大きな功績

平清盛と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。

「一門にあらざらん者はみな人非人なるべし(平家にあらずんば人にあらず)」の言葉どおり、傲慢が高じて周囲に多くの敵を作り、一度は打ち勝った源頼朝に滅ぼされた…。そんなところでしょうか。しかし、政治家として、あるいは経済人としても清盛の残した功績の大きさは認めざるを得ないでしょう。

平安末期、清盛は保元・平治の乱を経て源氏を叩きのめし、平安時代最高の役職である従一位太政大臣に昇りつめます。当時、武士の地位はまだ低い時代、清盛の運の強さがうかがえます。

清盛は、一族を各地の有力国司に次々と任命していき、荘園を拡大していくとともに、娘の徳子を高倉天皇に嫁がせ、その子である安徳天皇を帝位につけて皇室の外威として勢威を振ります。かといって、貴族然としていたばかりではありません。清盛は、海外貿易によって利益を上げようと画策を始めます。

宋(中国)との貿易を拡大するため福原の港(現在の神戸港)を大々的に改修し、日本からは砂鉄、木材、刀剣などが、宋からは陶磁器、織物、香料などを輸入、いわば貿易業のトップとして活躍します。とりわけ、宋の貨幣である宋銭を利用することで、物々交換中心の経済から貨幣経済の定着と普及という業績を果たすのです。

清盛の死因はマラリア?

いつときは天下を手中に入れた清盛でしたが、その最期は激しく、あっけないものでした。

原因不明の高熱に悶絶し、意識不明のままわずか数日間で亡くなったといわれます。

その様子は次のように記録されました。

「清盛、煩熱(はんねつ)を病み、冷水に浴す。水すなわち沸く」(頼山陽「日本外史」より)。

体が高熱を発し、冷たい水にさらすとたちまち水が湯になってしまうというのですから、その熱はただ事ではありません。あまりの熱さに近くに寄ることもできなかつたとか。清盛の苦しむ様子を知って、人々は、清盛が落日を扇子で招いたから、その罰として火の病にかかったのだと噂しました。京都には、清盛の熱を癒したという伝説が残る井戸があり、清盛の最期を描いた絵図もいくつか存在します。

急性の熱性伝染病だったのでしょうが、病名として有力なのは「マラリア」です。マラリアの歴史は古く、「えやみ」「わらはやみ」と呼ばれていました。蚊を媒介として人に感染する疫病で、突然の高熱と頭痛、激しい震えに襲われます。新型コロナウイルスの感染経路が「人→人」「人→モノ→人」であるのに対し、マラリアは蚊によって感染します。どうやら清盛は、ある夏の晩に一匹の蚊に刺されたようで、病状からみてマラリアではなかったかと伝えられます。

人は、生きてきたように死んでいきます。享年64歳。清盛の生は激しく敵多く、乱世を駆け抜けるような生き方でした。死ぬときもしかり、です。死に方は選べないというものの、それはそれで清盛らしい姿といえるのではないのでしょうか。

